



けやき会通信



新任のご挨拶

代謝内分泌内科 医師 関 康史

本年4月から代謝内分泌内科に医長として着任いたしました関康史と申します。私は、慶應義塾大学を卒業し、平成24年に東京女子医科大学高血圧・内分泌内科に入局し、現在に至ります。前任の高野医師に引き継ぎ、外来や病棟での診療を担当いたします。

学生時代、私は糖尿病がなぜ色々な臓器にダメージを与えるのかに興味を持ち、実験動物の糖尿病腎症に関する実験を行っていました。医師になってからは、何が糖尿病を引き起こすのかに興味を持ち、大学病院では糖尿病を引き起こす下垂体や甲状腺、副腎といったホルモン臓器の疾患の診断、治療に従事していました。その中でわかってきたことは、体の中のさまざまなホルモンは、多すぎても少なすぎても体に悪影響を与え、気づかない間に糖尿病を引き起こしたり、糖尿病を悪くしたりするという事です。

血糖値を下げるホルモンとしてはインスリンが有名ですが、逆に血糖値を上げるホルモンは多数あります。飢餓状態でも血糖値を上げて生き延びるために進化してきたためと言われています。糖尿病の発症のメカニズムとしては、インスリンの出が悪い、もしくは効が悪い、の大きく2つのメカニズムがありますが、実は血糖値を上げるホルモンも複雑に関係しているとされます。体内にある様々なホルモンのバランスが取れなくなった結果が、血糖値の変化に現れ、最終的にはさまざまな臓器の不調へとつながります。しかし、複数のホルモンが一日中どのように変化し、何のホルモンが異常かを一つ一つ把握することはできません。このため、ホルモンのバランスと関連する症状としての体調の変化と血糖値の変化を細かく見て、糖尿病の状態を把握したり、臓器へのダメージがないかを考えたりする必要があります。

しかし、病院で拝見する私も医師が、患者さんの体調を実際にみることができるのは、病院にいるごく短時間だけです。このため、患者さんには日々の体調の変化について是非とも教えていただき、血糖値の変化や臓器の不調がないかを一緒に考えたいと思っています。けやき会は私も医療者と患者さんがより身近になり、患者さんの普段の体調を知り、その変化に早く気づいて治療に結びつけることができるいい機会と思っています。糖尿病とともにこれまでどう体調が変化してきたのか、糖尿病とどう付き合ってきたかについて、けやき会で是非とも教えていただきたいと思います。

大学時代、私は学生オーケストラに所属し、クラリネットを担当していました。オーケストラでは全員で同じタイミングで音を出す必要がありますが、実は指揮棒を見ながら演奏してはなりません。指揮者の指揮棒を見ながら演奏すると、舞台の後列にいるクラリネットから出た音が、最前列のバイオリンに届くまでに時間がかかるため、クラリネットとバイオリンで音の出るタイミングがずれてしまいます（と習いました。本当なのかはわかりません）。実際には、周囲の演奏者の息遣いや気持ちを合わせつつ、バイオリン最前列のコンサートマスターの弓使いや表情（ずれると睨まれます）を見つつ、オーケストラ全体で気持ちを合わせながら演奏しています。診療においても、血液検査の結果を目で見るだけでなく、患者さんの息遣いや表情を見つつ、ホルモンのバランスに気を配りながら患者さんと気持ちを合わせて、より良い糖尿病診療ができればと考えています。よろしくお願いたします。

